

糖尿病対策プロジェクト

豊川市保健センター

愛知県豊川市では、県国保連モデル事業をきっかけとして、健康課題を見える化。保健センターが事務局を担い、農務課、保育課、スポーツ課、保険年金課、介護高齢課など6課からなる「糖尿病対策プロジェクトチーム」を発足させ、プロジェクトチーム発案のポスターを医療機関や美容院、衣料品店、介護支援事業所などで周知するとともに、既存事業の見直しを図り、各課記入の「計画・評価表」で進捗管理しながら、横断的な対策に取り組んでいる。

概要・体制

・県国保連モデル事業の国保・介護・健康の3課の連携体制を維持するため、「糖尿病対策プロジェクトチーム」を発足。各課に声をかけ、農務課、保育課、スポーツ課を加えた6課で、互いの既存事業に糖尿病予防の視点を入れ、負担感の少ない横断的な取り組みを進めている。ヘモグロビンA1cの認知度向上を核にした周知、食堂啓発とともに、保健センターとスポーツ課のウォーキング教室の機能分化や、保育課と協働した保育園保護者向けの出前型予防講座の開催など、相互乗り入れで事業展開している。

背景・課題

・3課の分散配置の保健師らは、低い特定健診受診率、リピーター化する健康教室参加者、高騰する介護給付費や保険料などについて、課題視していた。
・特定健診受診者の7割がヘモグロビンA1c有所見者で、県平均より極端に多いことが判明した。

糖尿病対策プロジェクトチーム(定例会議 年5回)

保険年金課、介護高齢課、農務課、保育課、スポーツ課、豊川市保健所、保健センター(事務局)

企画政策課による連携促進要請

目標:「健診受診率向上」「HbA1cの意味を理解し、生活習慣の見直しと改善に取り組むこと」

6課による食堂啓発、ポスター、特産野菜たっぷり料理とよかわ汁、計画・評価表	保健センターとスポーツ課のウォーキング教室を機能分化	市役所食堂で、6課協働で、糖尿病予防やよかわ汁等をPR。その場で相談にも対応	農務課の図書館コラボ展示で特産品のPRで協働展示
保健所の集団給食施設指導に同行し、ベジファーストや野菜たっぷりメニュー等をPR	保健センターの予防教室等のチラシを特定健診等の通知などに同封	園長会でPRし、保育課と協働で保護者向け予防教室を出前型で実施	



保健センターの連携機能・役割

- ・プロジェクトチームの事務局として、定例会の運営や対策の進捗管理などを担っている。
- ・ただし、関係各課の既存事業に予防の視点を盛り込むなどの工夫をしているため、負担感は少ない。
- ・国保・介護保険、特定健診のデータ等を分析し、糖尿病を中心とした健康課題の見える化を図った。
- ・各種計画会議で連携事業をPRし、仲間を増やす。
- ・インパクトあるフレーズでポスターを協働作成。
- ・保健所の給食施設指導を活用して事業所に介入し、ポスター配置や「野菜の日」採用を実現。
- ・その中で、市民向けの周知の必要性を実感し、市役所食堂で6課による啓発事業を実施。
- ・担当者レベルの頻回な打ち合わせと、課題等を共有する「計画・評価表」への記入の促進を通し、各課から「この事業を使えば、あれもできる、これもできる」とアイデアが出るよう心掛けた。
- ・上司、部長・次長らに年度ごとにレクチャーを実施。

愛知県国保連モデル事業「健康なまちづくり推進事業」(平成25~27)年度

- ・医療費分析:脳内出血、脳梗塞、腎不全、糖尿病の一人当たり医療費が高い
- ・特定健診分析:ヘモグロビンA1c有所見者率が県平均より極端に高い

保険年金課 「低い特定健診受診率(県内ワースト3位)を上げたい」	保健センター 「健康教室の参加者がリピーターばかり」	介護高齢課 「高齢化で介護給付費も保険料も高騰する」
--	--------------------------------------	--------------------------------------

愛知県豊川保健所

効果・成果

・3課で開始したプロジェクトメンバーが庁内PR等により、6課に増えた。
・通知へのチラシの同封など、各課の既存事業の連携で、カバー率が高まった。
・ヘモグロビンA1cの認知度が向上(43.0%→65.7%)し、特定健診受診率も改善(33.9%→36.5%)。ヘモグロビンA1c有所見者率が72.7%→52.5%へと県平均並みに改善した。
・要介護者にも糖尿病患者が多いので、従来の取り組みに加え、重症化予防と介護予防を組み合わせて行うことについても、合意が得られた。

ポイント

- 県国保連モデル事業を活用、● 分散配置の保健師と3課長の合意、● 健康課題の「見える化」、● HbA1c認知度向上に特化、● 頻回な顔合わせ、● 既存事業の相互乗り入れで負担感を軽減、● 取り組みを共有する「計画・評価表」の活用、● 成果のフィードバック

糖尿病対策プロジェクト 豊川市保健センター(連携体制構築に向けたプロセス)



俯瞰的立場の職員の存在

・県保健所、県国保連がモデル事業に選定。

A 俯瞰的立場の職員



ツールをつくる

- ・キャッチコピーを選定しポスターやPOP等を作成。
- ・特産野菜たっぷりの簡単「とよかわ汁」を考案。
- ・共有のため、「計画・評価表」を作成。各課の事業に予防の視点を入れ目指す姿、課題等を記入。



評価・フィードバックする

- ・ヘモグロビンA1c認知度(43.0%→65.7%)、特定健診受診率(33.9%→36.5%)に改善。A1c有所見者率(72.7%→52.5%)が県平均並みに回復した。
- ・特定保健指導時に「野菜を最初に食べるようになった」との声が増加した。



位置についてヨーイ

・分散配置された保健師らは、「低い特定健診受診率を何とかしたい」「健康教室の参加者の多くがリピーター」「高齢化に伴い、介護保険給付と保険料が高騰する」と危機感を抱き、改善の必要性を感じていた。



根拠を集める

・各種データから脳内出血、脳梗塞、腎不全、糖尿病の医療費の高さ、A1c有所見者率の高さを把握。健康課題の「見える化」で意識を統一。



① 位置についてヨーイ



① 風をつかむ



② 根拠を集める



③ 仲間をつくる



④ 協議組織をつくる



⑤ ツールをつくる



⑥ 育てる、促す



⑦ 評価・フィードバック



風をつかむ

・県国保連の声掛けで、国保、介護、健康分門との連携が条件のモデル事業「健康なまちづくり推進事業」(平成25~27年)に着手。
・市企画部門の「政策連携会議」が類似事業の見直しを要請。



仲間をつくる

・モデル事業受託時、国保部門の課長が介護部門と保健センターに直接説明した。
・国保部門保健師は不安だったが、国保部門の課長が両課長に協力要請し、踏み切れた。
・3課と保健所でモデル事業チームを組織。



協議組織をつくる

・3課等でプロジェクトチームを立ち上げ、保健センターが事務局を担当。その際、各課の既存事業に糖尿病予防の視点を加え、負担感を軽減。
・「受診率向上」「A1cの意味を理解し生活習慣の見直しと改善に取り組むこと」を目標として掲げた。



育てる、促す

・保健所の集団給食施設指導に同行し、ベジファーストなどをPRし、数事業所が採用。
・ポスターを美容院、公共施設、医療機関等に掲示。
・健康増進計画や食育推進計画の会議等で声をかけ、連携先を拡大。農務課と野菜料理を協働開発し、クックパッドにアップ。園長会で説明の上、保育課と保護者向け教室、ヘルシーおやつの実施、給食便りに予防記事の掲載。スポーツ課とウォーキング教室の機能を分担。3課+上記3課で市役所食堂で新たに予防啓発を実施。
・頻回な顔合わせで各課の提案が活発化した。



B 人材育成の意識

人材育成の意識

・部長ら幹部に毎年、連携概要をチームでレクチャー。 ・担当者で頻回に打ち合わせ、意識を統一。「計画・評価表」でブレを解消。